

幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を求める人々。まことに彼らは、不正を行わず、主の道を歩みます。
詩篇 119 : 2, 3

先日の教団のオンラインセミナーで山口陽一師が「良心を育てる教育」の中で良心について語られました。良心は「共に知る」が語源的な意味で、ここから英語でコンシエンス。「共に知る」とは誰と共に知るのか？「良心学入門」（同志社大学：良心学研究センター出版）によれば①まず内なる他者（自己）と共に知る、②次に他者（第三者）と共に知る。そして③神（超越的他者）と共に知ることと挙げています。内なる他者と共に知ると言うのは、自分の心の声を聴く、自分をしっかり持つ言うこと、でもそのような良心を保つことが難しいといわれました。

良心を辞書で調べると「良心とは自身に内在する価値観（規範意識）に照らして、ことの可否ないし善悪を図るこころの働きのこと。」「道徳的な善悪をわきまえ、正しく行動しようとする心の動き」とありました。良心は生まれてからの環境やさまざまな経験、周囲の人々からの影響を受けながら確立されていくと思います。キリスト教綱要を二度にわたって訳された渡辺信夫師は良心というものが対話できる相手は神しかないとこれを訳しながら思われたそうです。内住する価値観を正しく保つには③の「神と共に知る」神に聴き、神と共にあることが必要だと思うのです。

詩篇の詩人は119篇で上記のみことばの他にも神を求める祈りをし、次のように主を賛美します。「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」（105節）。自分をしっかり持つため、神様のみことばを求め、耳を澄まし、聴き、みこころに従っていくとき、内在する自身がゆるぎない平安な良心を保つ者となれることでしょう。